

「先輩」としてのあり方

広島県立御調高等学校三年（広島県）

高橋 美来

私がこの高校に入った理由。それは、茶道部の存在であつた。

将来というものに無頓着だった私は、高校を選ぶのに苦戦していた。そんな時、家から近いというだけの高校のオーブンスクールの開催を聞いて参加することにした。そこで行われた部活動体験。私は、お菓子が食べられると聞いて茶道部に体験に行くことにした。あの時、和室の敷居を跨ごうとした時の緊張感は今でも忘れられない。学校の中とは思えない、旅館のような部屋。綺麗な畳と部屋に漂うお香の良い匂い。まるで異世界にでも足を踏み入れたかのようだった。そして私は人生で初めてお点前を見た。お点前をしている人の綺麗な姿勢。なめらかで上品な動きをする指先。私は一瞬で茶道の世界に引きずり込まれたのだ。私は思った。「この部屋で、あんな風にお点前がしてみたい」そして、入学を決意した。

期待と不安でいっぱい的高校一年生の春、私は再び和室の敷居を跨いだ。そして茶道部の新入部員になった私は、優しい先輩達と稽古に励むようになった。初めは帛紗を捌くところから。難しかったり、覚えることが多かったり、大変だったがそれでも楽しく部活動を行っていた。だが、時が過ぎ三年生の先輩が卒業し、新しい一年生が入学した頃、私は今までにない焦りに心を潰されそうになっていた。茶道部に新一年生が入部してくれた。その内一人が茶道経験者だったのだ。私よりも無駄のないお点前、綺麗な座り方。お稽古の前の準備の時も、一人黙々と準備をこなす。方や私は、未だに一人でお点前ができない、ましてや道具の名前も曖昧でちゃんと覚えられていない。私は「先輩」というプレッシャーに押され、潰されそうになっていた。中学の頃もそうだった。バスケットだった私は、後輩ができた途端にあまり練習に顔を出さなくなった。怖かったのだ。「後輩より出来の悪い先輩」という肩書きが。そして中学三年生の頃には幽霊部員と化していた。また、あんなるかもしれないと思った。

私は、その思いを一番の親友に打ち明けた。すると、あの一言が返ってきた。その一言は、私の心に重くのしかかったものを、一瞬にして取り払ってくれた。

「でも、好きなんでしょ？ 茶道」。

私は、頷くしかできなかった。そうだ。私は茶道が好き

だ。まだ、全然、何もできない。うまくお茶を点てられるわけでもない。それでも私は、誰かのためにお茶を一服点てる、あの時間が好きなのだ。

私は部活に出続けた。今でも出続けている。今では私は三年生になり、後輩がさらに増えた。だが、未だに私は下手くそだ。お点前も一人でできない。それでも、私は毎週木曜日のお稽古の日を楽しみに日々学校に通っている。私は今の自分をこう思う。「後輩より出来は悪いが誰よりも茶道を楽しんでいる先輩だ」と。茶道は、私を変えてくれた。行動する力をくれた。お菓子に釣られて体験に行き、ただ好きという理由だけで今もここにいるが、今ではそれも一つの正解だと思う。私は本当に、心からこの部活に入っただよかった。そして、今日も今日とて、先生に注意されながら、先生に尋ねながら、後輩に尋ねながらお茶を点て、美味しいお菓子に舌鼓を打つのだ。

挑戦

高知工業高等専門学校三年（高知県）

川本 朝陽

自分はあまり文章を書くことは得意ではないが、あえてこの茶道エッセイに応募しようと思った理由は『新しい挑戦』をしたかったからです。

中学三年間茶道部でしたが、同学年が一人もいませんでした。高専に入ってから同じく学年唯一の茶道部で、今は部長を務めています。高専には、一年生から五年生がいて中学の時よりも、部員が沢山います。だから今の環境がとても好きで、部員の皆と茶道をすることが楽しいです。自分が茶道に出会ったきっかけは、祖母です。自分は、俗にいう『おばあちゃん子』でした。祖母はよくお抹茶を点ててくれました。祖母の好きな所は、自分より人のことを最優先に考えて行動する所で、始め自分に点ててくれたお抹茶には、祖母のそんな心の温かさを感じました。そして自分もお抹茶を点ててみたいと思い、何度か一緒に点てました。そういう祖母とのやり取りをきっかけに茶道とい

うものが好きになり、中学生になって茶道部に入りました。それが、初めての挑戦だったのかもしれませんが。しかし茶道部に入って二カ月経ったある日のこと、自分の大好きな祖母が癌で亡くなりました。自分は、そのことを信じたくなかった。しばらくの間立ち直ることができませんでした。それでも茶道は続けました。

茶道の形は、季節が変わりゆくごとに変わっていくのも魅力のひとつです。例えば、お点前や使うお道具、お花。お稽古するごとに新しい発見があります。

そしてまた挑戦する機会も与えてくれました。今年、自分の発案で文化祭にて模擬店を出すことになりました。去年は、コロナの為外部の方が来られませんでした。ですが今回は、誰でも来ることができるので楽しみにしています。自分が模擬店の代表ということは、後輩だけでなく先輩達にも指示しないといけない。模擬店を成功させるには、お互いに支え合うことが必要です。困ったことがあれば仲間頼る。声をかけ支え合うことで、一人でできないことも可能になると信じています。模擬店では、着物を着てお点前をします。来ていただいた方に、優雅な雰囲気でお点前をします。楽しんでもらいたいと考えています。ゼロから自分の力だけで築き上げていくのは、大変な労力と時間を要します。しかし、挑戦し終えた後は、『楽しかった』『やってよかった』ときっと、感じると思います。

何事も挑戦するには、勇気が必要です。そして最初は、不安で心が押しつぶされそうになることもあります。でも、やり遂げた後は、安堵感や達成感があります。今では自分にとっての生きがいになっているかもしれません。

今年で茶道を始めて五年目になる。率直に言うと、好きだからこそこんなにも長く茶道を続けられているのだと思います。中学生の時の部長とは違い、毎月書類を出したり、外部の先生を呼ぶのにも自分でメールをしたりする必要がありません。それには責任感が伴います。自分の目標の一つに、人から慕われるようなになりたいということがあります。そのためにも、自分の仕事を全うしなければなりません。また、部員のことを一番に思い、一人でお点前できない一年生にも優しく教えて、茶道の楽しさを知ってもらいたい。大好きな祖母がそうであったように。

来年で、四年生になります。自分は進学すると決めているので勉強面ですますます忙しくなり、茶道に接する機会が少なくなるかもしれない。これからも色々な挑戦が待っていると思う。失敗を恐れず何度も立ち上がり挑戦し続けたい。

はぢをすて人に物とひ習ふべし

徳島文理高等学校一年（徳島県）

鹿島 熙子

先日、家にいらした外国人のお客様にお茶を一服差し上げる機会があった。前回の来訪の時には、盆略点前でお茶を差し上げた。今回は、少し背伸びをして、寿棚を使った薄茶点前にチャレンジしてみた。ちょうど今年四月に高校生になってから、茶道部でも棚を使った薄茶点前を教えていただいている。人前で点前を見られる自信が少しづついていたのだ。

お菓子もお茶も楽しんでいただいて、点前の最後に差し加かったころ、

「Why are you turning back the water?」

との問いがあった。湯返しに疑問をもった様子だった。英語での返答もさることながら、その問いには日本語でさえも答えることができなかった。

私は急に恥ずかしくなった。さっきまでの「私のお点前をみてちょうだい」の自信が吹き飛んでしまった。

「棚は台子が基本だからね。杓立に柄杓を戻すために露を切るのよ」と母が助け船を出してくれた。しかし、それは中途半端な助け船に終わってしまった。なぜなら、母は英語を助けてはくれなかったからだ。

学校の茶道部で、ご指導をくださっている春藤宗美先生は何でも物知りで、私たち部員に愛情を持ってくださったことを教えてくださる。去年中学生の頃にいただいたプリントを思い出して、数奇屋袋の中から取り出してみた。

「はぢをすて人に物とひ習ふべし是ぞ上手の基なりける」

「One should abandon feelings of embarrassment and ask people questions this is the keystone to becoming adept.」
利休百首とその英訳のプリントの中から、この一首が私の心に深く飛び込んできた。

「人に訊くのは一瞬だけれど、知らないのを通すのは一生の恥になるからね」

という春藤先生のお話も脳裏に蘇ってきた。

私が茶道を続けている理由のひとつに、日本の良さを外国の人にも伝えたいということがある。日本人として、日本のこと、とりわけ日本独自の文化についてよく知りたいのだ。

点前の順序を知って点前ができるようになったから、少し天狗になりかけていた。もっと本質の茶道の心を知らなければならぬのだ。まだ高校生、道はきつと長いだろう。

だが、この利休百首を胸に刻み、訊くことを恥と思わず、ほかの人からたくさんのことを学び続けていきたい。

今度、同じお客様がいらしたときには、照れ笑いでごまかさずに、きちんと「湯返し」について説明してみよう。そして、私の知らないことがあれば、そうだ、貴国の文化についても訊いてみよう。もちろん、美味しいお菓子やお茶、おもてなしの心も忘れずに。

一碗の茶に込められた想い

都城市立祝吉中学校三年（宮崎県）

岩廣 奈海

三年前のある日、一碗の茶を飲み、私の目から涙が溢れ、声を上げて泣いた。

私を大切に育ててくれた最愛の祖父を突然亡くし、抜け殻状態だった私を茶道の先生が茶室に招き、茶を点ててくださった。先生が作り上げた茶室の静けさに癒やされ、茶道の「客人を想い、全力を尽くすおもてなしの心」を実感し、私の暗く沈んだ心が解放された。

私は小学校のクラブ活動で茶道の楽しさを知り、更に深く学びたいと思い、クラブ活動でお世話になった先生に相談し、正式に入門した。

今年、日向市で開催された裏千家の鵬雲斎大宗匠の講演会を聞く貴重な機会を得た。大宗匠は「一盃からピースフルネスを」の理念で活動されており、特に太平洋戦争の時、ご自身が特攻隊員として戦地に赴く際に茶道具を持参され、出撃前の戦友のために茶を点てたエピソードに心を打

たれた。

「生きて帰ったら、お前の茶室で茶を飲ませてくれや」
戦友は言い、飛び立った。大宗匠はどのような思いで見送ったのだろう。特攻隊員として、国に死を強制された彼らにとつて、この一碗の茶は、人として生きていることを実感した最後の一刻だったのではないだろうか。ご自身の経験から、平和や安心できる心を持つピースフルネスという考えが生まれ、茶道を通じ、多くの方に寄り添ってこられた事に共感し、感銘を受けた。

私の祖父は生前、戦死した曾祖父の、遺品や家族にまつわる話をよく聞かせてくれた。写真でしか見たことのない曾祖父だが、遺品や手紙が大切に残されている。遺書の最後には「誠にすまなかった。心配ばかりかけただけでなく、その方の一生も犠牲にしてなんとも詫びようがない。呉々も体を大事に。遥かにその方の幸せを祈る」と曾祖母に向け、書かれている。曾祖母はこれを読み、泣き崩れたそう。十年近くも海を隔て数百里、想い合いながら西と東に別々に暮らし、遂には逢う事も叶わなかった。そこには時代に翻弄された家族の姿があり、胸が引き裂かれる思いがあった。

戦争により、大切な家族を失った人々や犠牲にあったあまりにも多くの尊い命。生き延びた人々も心に深い傷を負い、日本は多くのものを失い、悲しみが生まれた。それは

日本だけでなく、対戦国もまた同じだ。一人一人が心を持った人間である。争いからは何も得られない。お互いがお互いを理解し合い、認め、相手を思いやることで大宗匠のおっしゃるピースフルネスな心になるのではないだろうか。

私はこうして鉛筆を持ち勉強に励み、茶道を学ぶことができている。なんともありがたいことだ。だが、本当にそれで良いのだろうか。自分だけ、自分の国だけ良ければ良いのだろうか。先人達が命を賭け、守りたかった未来とはどのようなものなのだろうか。

慢心や自分に執着する心があると茶の心の世界を捉えることはできない。進んで教えを乞い、よく育つように心がける。そうすることによって初めて、慢心と執着を越え、「冷え枯るる心」に到達することができる。村田珠光は言う。

私は曾祖父の犠牲の上に今を生きている。だからこそ、私は「自分には何ができるだろう」と常に考えながら、茶道を通じ、相手を思いやることの大切さを学んでいきたい。そして、感謝の心を持ち、いつか私も相手を想い、温かい気持ちに包まれるような茶を点てることができる人になりたい。

三年前のあの日、一碗の茶を点ててくれた先生のように…。